

資料選択要因の考察  
A Consideration of Factors Affecting the Selection of  
Library Materials

長 沢 雅 男  
*Masao Nagasawa*

*Résumé*

It is doubtful whether adequate attention has been paid to book selection in Japanese libraries. Proper selection of materials for the development of the collection when publishers' output is increasing at an astonishing rate occupies uncomparably important place at present. The value of a library largely depends upon the way in which the stored materials have been selected. Book selection precedes all other library procedures and activities. Without well-organized collection kept up-to-date by both acquiring necessary materials and eliminating the unnecessary, it is difficult to achieve the effective library service.

One of the most important factors to affect the book selection policy is the demand of clientele for materials, but the selection cannot be reduced to the physical supply of materials to meet the demand. The writer, therefore, tries to discuss various factors having influence upon the book selection practice. In any library the following factors may be worth due consideration: (i) the kind and purpose of the library and the community it serves; (ii) needs and desires of individuals; (iii) the size and the characteristics of the existing collection; (iv) the individual material's potentiality to fulfill various users' demands; (v) shelving space and the availability of the resources of nearby libraries; (vi) available funds for purchasing library materials; and (vii) the intellectual faculty and ability of those responsible for or related to the book selection.

All these factors are, of course, overlapping and not mutually exclusive. Many obstructions can be eliminated by the effective use of suitable bibliographical aids, even when the aids cannot necessarily meet each specific demand or search.

It is discussed, too, that the desirability of establishing a selection system wholly responsible for the examination and realization of selection policy based on the factors above-mentioned.

(Japan Library School)

- は じ め に  
I. 資料選択の意義  
II. 資料選択にかかわる諸要因  
III. 選択機構および選択方針  
お わ り に

## はじめに

近年の図書館にみられる一般的傾向として、資料の保存から利用サービスへと図書館業務における関心の焦点が移ってきたことが指摘できる。そのこと自体は図書館の従来没却されていた機能面を新たに開発したものとみることができるので、わが国の図書館にとって一つの望ましい進歩であるともいえる。しかし、コレクションの構成という観点に立って図書館業務をみるならば、このような単純な強調点の移行は相対的に蔵書構成の軽視という憂慮すべき側面を伴っていることを指摘しなくてはならない。

周知のように知識層が拡大し、文献を利用する人々が著しく増大し、記録資料が急速かつ大量に氾濫したことは、必然的に図書館における資料収集の重要性を増大せしめる結果をもたらした。経済的にも時間的にも、一個の図書館の資料収集能力の限界を上まわる多量の資料が生産され、流通するようになったために、何らかの対処手段を講じなければ、図書館の資料収集活動が麻痺してしまう事態にたちいたったのである。

わが国の図書館は現在でもなお保存中心主義を踏襲しているという非難が浴びせられるのを耳にすることがあるが、それは著しく弱体な利用面と対比してみられた皮相な見解であるにすぎない。また戦後の図書館サービス高揚期に、直接利用者に接しない資料の収集、組織の果す役割を軽視するかのような言辞を不用意に洩すものがないからといっていい。しかし、新しい気運に乗じて表面では活況を呈する図書館であっても、多くの場合、保存の面さえ十分手がまわらず、そのために生起する幾多の問題点には目を覆ったまま、強調点を利用面に移さざるをえなかったというのが実情であろう。資料の保存は、図書館の場合は利用のための手段であると考えられるから、利用を考慮しない保存は全く無意味であるというほかはない。しかし同時に、選択という過程を経ないで収集されたコレクションの保存が利用効率という面からみて、いかに不経済であるかは説明するまでもない。そのようなコレクションは情報価値が低く、幾多の利用上の欠陥を蔵していると考えられる。したがって、いかに利用サービスの重要性を主張しようとも、資料選択の段階において充分留意してコレクションを構成するのしなければ、利用サービスそのものが制約を受け、その実効性が阻害されることは避けられない。

このように、資料の選択は利用サービスを左右する基

礎条件であるという見地から、資料選択にかかわる諸要因を検討することが、資料選択の問題を科学的に把握するための手がかりを得ることにはならないであろうか。本稿では、このような意図のもとに、選択上の諸要因をとりあげて検討し、それらに対応して、書誌類を選択ツールとして利用することが、選択上の阻害要因を除去するのに役立つことを明らかにしたい。

また、多量の資料のうちから特定の資料を選択しようとする場合、一貫性のある組織的な選択業務を可能にするためには、個々の図書館がおかれている諸条件に照らし合せ、選択基準を明文化して、選択方針を規定する必要がある。しかも、その効果的運用は選択機構を整備し、適切な選択ツールの活用を俟ってはじめて可能であることを併せて検討することにする。

## I. 資料選択の意義

図書を推薦するためとか、読書リストや選択リストを作成するためとか、個人が特定の利用目的をもってコレクションをつくるためとか、目的は異なるけれども、資料の選択が行なわれる機会は少なくない。しかし、ここにとりあげて論じようとする資料の選択とは図書館のコレクションを構成し、かつそれを維持することを目的としてなされる図書館業務のことを指している。

コレクションの構成は個々の資料を構成要素として、一つの有機的な統一体としてのコレクションを作成することを目的としている。したがって、コレクションの利用価値を高めるためには、個々の資料の選択に十分留意しなければならないことはいうまでもないが、それが個々の資料の価値という観点だけから選ばれるのではない。構成されたコレクションが利用者に対応して個々の資料の情報価値の総和より、より以上の情報価値を有するような組合せになるように絶えず配慮することも資料選択において忘れられてはならないことである。

仮りに、そのようなコレクションの構成を目標として慎重な資料の選択が続けられたとしても、その利用価値が絶えざる変化にさらされることは避けられない。資料の利用価値は一般に時の経過とともに減退する傾向をもつからである。したがって、利用価値を保持するためには時の試練に耐えうる資料を選択し、利用価値を失ったり、著しく減じたりした資料を除去しつつ、新たな資料を補給することによって、コレクションの新陳代謝が図られる必要がある。つまり、コレクションの精選淘汰と資料の選択はコレクションの情報価値を高めることを共

通の目標とする表裏の関係をなす図書館業務である。このようなコレクションの構成と維持のためになされる資料選択上の諸問題を検討するのが本稿の目的である。

あらゆる学問分野において、知識、技術の急速な開発、社会生活の複雑化に伴って、出版物が量的に、また形態的に著しく増大かつ多様化したことは、必然的に社会生活、研究生活等における資料に対する依存度を強め、文献情報を一層重要視せしめるに至った。現在では、われわれは正に多量の出版物の洪水に圧倒されつつあるといえる。いかなる図書館においても、その程度の差こそあれ、包括的で完璧な資料の収集ということは全く不可能となり、収集過程において、何らかの方法で選択という操作を加えざるを得ない現実的事態に当面している。

また仮りに、特定分野において網羅的な資料の収集が可能であったとしても、無批判な受入れによって膨大な量のぼろ玉石混淆の資料を集積することは、利用者に対して決して望ましい結果をもたらさないことは明らかである。財源不足を招くだけでなく、不要な資料が混在することによって、かえって利用上の効率を低下せしめ、またスペース不足の原因ともなるからである。つまり、文献量が比較的限られていた時代ならばともかく、圧倒的に多量の文献が生産されつつある現在では、図書館は単なる資料の収集・受入の問題にとどまらず、資料の選択にこそ最大の関心をもって取り組む必要がある。

資料が少なければ、積極的に収集に努め、大コレクションをつくることによって、ある程度、質的な保証も得られようが、今日のように多量の資料を前にしては、もはやそれは望みえないことである。ある資料を選択するということは、他の資料を選択しないことを意味している。したがって、選択の際に個々の資料に対する適切な評価を欠くならば、結果として構成されたコレクションに対して確信を持つことができず、現在の利用者のみならず、後世の人々の厳しい批判の矢面に立つことは免れえないところであろう。

## II. 資料選択にかかわる諸要因

従来、図書館における資料選択論の原理的追求として、価値論と要求論とがしばしばとりあげられてきた。<sup>1)</sup>これらは理論というよりは、むしろ特定の根拠に基づく主張といった方が適当であろう。すなわち、利用者のために図書館その他の機関が何らかの価値基準を設けて資料の取捨選択の尺度とすべきことを主張する立場が価値論と呼ばれ、利用者の要求充足に最大限の力点を置こう

とする立場が要求論と呼ばれているにすぎない。

多くの公共図書館の場合を例にとって、利用者と図書館員との関係をみるならば、一般的には利用者よりも図書館員が資料に関して、より広範で、しかも深い知識をもっていると考えられている。そのような理由から、図書館側において選択する価値があると見做す資料を図書館員の裁量によって選ぶる枠がかなり拡張されることになる。これが価値論の立場である。

他方、学術図書館とか、専門図書館とか呼ばれる館種にあっては、多くの主題専門家を利用者としているために、専門主題の資料の選択に際しては、選択の可否に関するかれら専門家のかかなり自由な発言が認められることになる。たとえ主題の専門家が専門主題の、あるいはそれに関連する領域の資料の専門家であろうとなかろうと、そのことはあまり問題にされないのが普通である。このように資料選択における利用者の主導的立場を認め、その要求に基づいて資料を選択した方がよいとするのが要求論の根拠にはかならない。このように対立的にとりあげられる両論を実際の資料選択の場にあてはめてみた場合、特定の図書館が両論のいずれに傾斜するかは、資料選択にかかわる諸要因のうちのいずれに大きなウェイトがかけられるかによって決まるものと思われる。

一方では、図書館その他の機関が価値あるものとして提供しようとする資料は時々刻々生産され、累積されてゆく。他方では利用者の資料に対する要求は研究方法の変化・発展、研究活動の進捗状況、あるいは社会的関心の推移などに応じて絶えず変化している。図書館がおかれている環境および時代とともに転換する関係のもとにおいては、抽象的な価値論とか、要求論とかいう立場からなされる議論によるのみでは、満足すべき決着は容易に得られそうにもない。したがって、これら両論について、さらに若干の検討を加え、その主張の根拠を確かめるならば、新たな示唆が得られるのではなからうか。

まず価値論については次のように考えることができる。すなわち、ある資料に価値があるとか、ないとかいったところで、それは資料の性質、またはその資料に附随した特性のことをいっているのではない。要するに、資料は利用できるからこそ価値があるのであり、一般の資料について先験的な究極価値、絶対価値というものとは考えられない。選択にかかわる資料の価値はすべて J. Dewey のいう目的・手段関係における相対的なものである。つまり資料の評価者がその資料に付与する性質であるから、常に特定の評価主体の要求、嗜好などがその

## 資料選択要因の考察

底にあるはずである。それゆえに、この場合、唯一絶対の価値というものはなく、価値は相対的なものとしてのみ捉えられる。利用者が要求を提示するのは、彼にとって特定の資料が価値をもつと考えられるからである。価値をこのように考えるとすれば、資料選択論においていわれている価値論は、せんじ詰めるならば、要求論に解消されることになってしまう。

しかし、図書館における資料の選択は要求に対する単なる供給というかたちには止まるわけではない。利用者は、いうまでもなく、自分の立場からする要求を出すのであるから、不当に精神的な発言を無批判に認めることは、資料費の乱費を招き、往々にして偏頗な利用価値の乏しいコレクションをつくる結果にもなりかねない。もっとも、要求を無批判に受入れてはならないといっても、實際上、要求がどの程度のものなのか、現在の研究段階では具体的な欲求や興味を、それが実際に存在するままに経験的に分析し、測定することができないところに問題が残る。

いずれにしても、具体的な要求に対しては、何らかの調整手段を講じなければ、図書館のコレクションをつくり上げるという大局的立場に立って、蔵書構成の本来の目的と合致する資料選択を行なうことはできない。いかなる図書館においても、資料を選択する場合には、利用者の利用の立場からなされる要求に応じながら図書館自体の目的を反映させ、これを調和させるように考慮することこそ、実際の解決を求める方向であろう。個別的な要求を抑制するという目的のみから出たものではなく、選択に及ぼす諸要因を斟酌し、予算の効果的な支出を計るために資料収集過程を調整し、情報的価値を最大限に発揮するようなコレクションをつくるために、個々の資料を選び出すことが資料選択の究極目的であるはずである。

それでは資料選択に影響を及ぼす一般的な要因は何であろうか。それぞれの図書館には多数の複雑な要因がからみ合っているが、以下においては、各館種に共通する主な要因、およびそれに対応する選択ツールとして各種の書誌類をとりあげてみたい。

### A. 図書館の目的

まず第一に、図書館が属している機関の性格・目的、あるいは図書館を設立している地域社会の特徴が最も大きな要因をなしていることは否定しえないところである。なぜならば、図書館はそれらの要求に応えることこそ、最大の使命を帯びているからである。例えば、上

部機関が研究調査活動を行なっているならば、それがどのような目的のもとに、どのような規模で行なわれているのか、現状とともに将来の動向をも検討する必要がある。現在（現実）の要求を満たすことに重点を置くべきであることはいうまでもないが、将来の（予測できる）要求を全く斟酌しないわけにはいかないからである。同様に、地域社会についても、その地域的特性、主要な文化的、社会的行事、一般の関心事、主要団体の活動などの分析に基づく要求の把握が必要になる。

刻々と変化する利用者の現在の要求の短期的サイクルだけを考慮すれば事足りる図書館ばかりではなく、図書館の規模が大きくなるにつれて、要求の長期的サイクルもあわせて考えなければならなくなる。要求があってから収集にとりかかるのでは、もうすでに遅く、要求を予測して選択しておき、要求を迎えるとか、また要求を醸成して利用を待つことこそ、資料選択の真髄を見出さなければならない。

このことは質的な問題だけでなく、量的な問題にもかかわっている。ベスト・セラー現象にみられるように、利用者の要求が一時的に顕著となるが、一定の時期を経過すると、急速に利用頻度が減退するとか、ほとんど利用されなくなる場合も少なくない。また逆に、現在の利用は極めて低調であるが、一般的な動向として、将来必ず強い要求が出されてくると予測される場合、現在受入れておかなければ将来入手できない資料をどうするかという問題も、この要因と関連して検討すべきである。つまり、そのことはそれぞれの館種の図書館の目的に即した資料に対する要求が資料選択のあり方に及ぼす主要な要因の一つとして数えられるということである。

館種の面からくる要因に配慮するならば、実際の資料選択においては各館種を対象とする選択ツールが必要になる。例えば、学校図書館のコレクションをつくるための「学校図書館基本図書目録」、<sup>2)</sup> 小説を除く公共図書館の基本図書をリストした *Standard catalog for public libraries*、<sup>3)</sup> 高校、中学校図書館を対象とする *Standard catalog for high school*、<sup>4)</sup> 公共図書館の児童室、学校図書館のための *Children's catalog*、<sup>5)</sup> などの選択書誌は、いずれも特定の館種を想定して編さんされたものであるから、館種の要因にかかわる選択ツールとして有用である。もっとも、専門図書館としてグループされる館種は、上部機関の種類が極めて多様であり、しかも扱われる主題内容がそれぞれに限定されているので、他の館種のように、館種一般の面からおさえられた書誌というも

のではない。法律図書館、医学図書館、工学図書館のごとく、さらに取扱う主題が細分された図書館を対象にするか、あるいは専門主題資料を収録している主題書誌が役立つであろう。

上述のような選択書誌を利用することによって、各館種に対する典型的なコレクションを構成することが可能となろうが、それが必ずしも個々の利用者の要求を満たすとは考えられない。そこに第2の要因として、利用者の個別的な要求を検討する理由がある。

### B. 利用者の要求

利用者のために資料を選択するのであるから、彼らの個別的な要求について質および量の両面から検討が加えられなければならない。まず質の面についてみるならば、どのようなバックグラウンドをもち、どのような要求、嗜好、あるいは関心をもっている人々から特定の利用者群が構成されているのか。またどのような内容の人員構成であるかなどを検討の手がかりにして利用者の要求を把握する目安をうる必要がある。これは第1の要因から導き出される要因であるが、利用者の個別的な要求のすべてを上部機関の要求、あるいは地域社会の特性に基づく要求に還元することはできない。第1の要因は個人の自由意志を左右する外部的な条件であり、自由意志を制約するとは考えられるけれども、それによって人間の自由意志が完全に拘束されることはないからである。

利用者の要求は、実際に要求として表明されたものだけでなく、潜在的なものもある。したがって、要求に応えるためには、この両面の要求に対処する手段を講ずる必要がある。一般的に考えられることは、利用者が現在あるいは将来の研究、調査、日常業務、学習、教養、趣味的活動などのあらゆる場面に応じて、どのようなかたちの資料要求を出すかを検討する方法である。研究の場合を例にとるならば、問題の確認、仮説の設定、調査方法の決定、実験、観察（あるいは調査）、結論の導入、結論の妥当性の検証、さらに研究発表、報告書の作成などの各段階において、そのウェイトは異なるにせよ、それぞれに対応する資料要求がなされることは周知の通りである。

これに関連して、雑誌論文の引用文献に関心を抱いたり、同僚との会話によって特定の文献に興味をもったりして資料の要求をすることもあろう。ただし、研究者相互のコミュニケーションによって抜刷交換、学会関係資料の収集などが個人ベースで行なわれることが多いので、實際上、図書館に対して、この種の資料が要求され

ることは少ない。しかし、図書館が従来収集の対象とは考えていなかったこの種の資料は年々増加し、しかも重要性を加えてきているので、今後の資料選択においては十分考慮すべき問題である。そのことは、取りもなおさず、図書館が個別的な研究者の文献収集に協力加担する必要があるということの意味している。

研究の場合を例にとってみただけでも、これ以外に、学習、教養、趣味、日常業務などに基づく資料要求の場合にも、個別的にみるならば、いずれもそれぞれに正当な動機、利用目的などがあるはずである。これらの詮索は最近、図書館利用あるいは文献利用習慣を捉えようという目的のもとに盛んに行なわれているが、本稿の目的とするところではないので割愛する。

また、利用者の要求の量的な面としては、すでに述べたベスト・セラー現象の場合のように、同一の資料に対して多数の利用要求が殺到する場合、その資料を果してどの程度重複受入れすべきであるかという問題につながる。図書館は個人のコレクションでなく、共通に利用されるコレクションであることを前提とするならば、たとえ一時的にせよ、数多くの要求が出された場合に、資料の質的な面のみを考えて、量的な面を無視するならば、結果的には要求そのものを無視したことと変りはない。

このように質的にも量的にも極めて多様な要求が館種の面からだけでは十分に捉えられないということは確かである。しかし逆に、個人の要求の割り出しはできても、これらの要求が広範多岐にわたるならば、個別的な要求を前提としてコレクションを構成しようとする目標に要求を統一するのは容易なことではない。したがって、サービスの対象としての上部機関の目的、あるいは地域社会の特性に照らし合せて個別的な要求の性格を評価し、調整する必要が生ずる。

すでに述べた館種を対象とする選択書誌に収録された資料から選択することは、上述の見地からすれば一つの賢明な方策である。選択書誌はいずれも利用対象を考慮し、一定の選択基準を設け、多くの資料の中から、その基準を満たす資料を選択的にリストしたものであるから個々の利用者に対応する資料の発見に役立てることができ。このほか、特に館種による規制のない、各国で出されている一般の選択書誌も有用である。例えば、公共図書館、学校図書館、公民館などの読書施設の適書を推薦しようとする「選定図書週報」<sup>6)</sup> その累積巻として年刊の「選定図書総目録」<sup>7)</sup> 主としてアメリカの公共図書館の利用者を対象とする *Booklist and subscription*

## 資料選択要因の考察

*books bulletin*,<sup>8)</sup> イギリスの *British book news*,<sup>9)</sup> ドイツの *Das deutsche Buch*,<sup>10)</sup> フランスの *Bulletin critique du livre français*<sup>11)</sup> など、いずれも発行頻度の多い逐次刊行物として出されているので、定期的な選択活動を行なうためには便利である。

### C. コレクションの性格

第3に、コレクションにかかわる要因が考えられる。いうまでもなく、新規にコレクションをつくる場合の資料選択と、すでに出来上がったコレクションの維持のためのそれとは、資料選択のあり方が異なってくるし、当然利用しうる選択ツールも異なる。つまり、資料選択の時点における保有資料の質と量とが、資料の追加と廃棄とに密接な関係をもっているのである。

コレクションの性格は館種およびその機能の設定のしかたによって制約される。しかもその規模がコレクションの性格と無関係ではない。研究調査を目的として利用される図書館であるならば、いうまでもなく研究調査用コレクションを持っているはずである。しかし、その性格は規模によって一様ではない。実用的な基礎的コレクション、一般の研究調査用コレクション、高度な研究調査用コレクション、網羅的な専門主題のコレクションなどのように、その規模がその質的な性格を左右する幾種かのコレクションを便宜上とりあげることができる。ここに実用的な基礎的コレクションとして総括するものは、比較的僅かな利用者のための小規模なコレクションであるが、当該研究調査分野の人ならば、誰でも必要とするような基礎的な情報を提供する資料からなるものである。次に、一般的な研究調査用コレクションは前者よりも規模が大きく、一般の研究調査活動における資料情報に対する要求には大体応じうる程度の専門資料を揃えたコレクションである。第3に、高度な研究調査用コレクションと呼ぶものは、前者に加えて、他の学問分野の研究成果を求めたり、各専門領域の研究者によるグループ研究のための需要にも応じうる豊富な研究資料、データ等を収集し、研究動向に応じて機動力を発揮することができるコレクションであり、資料の内容だけでなく、そのタイプも多様である。最後に、網羅的な専門主題コレクションとしてまとめたのは、特定の主題範囲を設定し、その分野のあらゆる資料を積極的に収集することを意図してつくられたコレクションである。たとえ現在では利用されない資料でも、将来の利用を予測し、あるいは歴史的な資料としての意味を含めて網羅的に収集されるので、必然的に保存的性格が強まったコレクションに

なるであろう。

以上のように、便宜上研究調査用のコレクションを規模によって4大別してみたが、その規模は固定的なものではなく、生長して規模が大きくなれば性格も異なってくる。他の館種についても、同じように、その規模に応じて幾種類かのコレクションを想定することができるであろう。いずれのコレクションも選択ツールの面からみれば、基本図書目録の資料が基礎となり、それに専門文献目録、各種タイプの資料目録の収録資料が附加されるかたちをとっていると考えられる。

どのようなコレクションを構成し、維持するにせよ、そのコレクションの性格ならびに規模が資料選択にかかわる主要な要因であることには変りはない。現有のコレクションの性格および規模を端的に現わしているのが、いうまでもなく書誌的検索ツールとしての所蔵目録である。重複購入を避けながら資料を補給するためには所蔵目録を利用して重複調査をする必要がある。また所蔵資料の廃棄の際にも所蔵目録を参照して調整する必要がある。そのほか、すぐれた書誌や他の同種の図書館の所蔵目録と照合することによって、コレクションの評価が行なわれる。例えば、大学図書館のコレクションを評価するために、現在ではすでに古いけれども、Charles B. Shaw の *A list of books for college libraries*<sup>12)</sup> や、学部学生のためのコレクションの所蔵目録 *Catalog of the Lamont Library, Harvard College*<sup>13)</sup> が用いられることがある。

### D. 資料の性格

第4に、コレクションの構成要素である資料そのものにかかわる要因が考えられる。記録された知識としての資料から得られる情報は時間的、空間的制約から自由である。したがって、反覆の利用が可能であり、しかも他の物品とは違って、利用者との関係において、その意義づけが異なるだろうことも当然予想される。そのことから、新刊資料と刊行されてから時を経た資料とのいずれに重点を置くかという問題も生ずる。J. Periam Danton は新旧資料のいずれの選択に重点をおくべきかという議論において、対立する意見を次のように要約している。<sup>14)</sup>

新刊資料購入の利点：

1. 大部分の図書に対する要求は——長い間、学術的価値を保っているものでさえも——刊行直後に最も強くあらわれる。新刊の図書を気前よく購入しておくかなければ、図書館利用者の最も直接的な現在の関

心なり、要求なりを満たし得ないことになるし、図書館の位置やその利用者の研究がひどく被害を蒙ることになる。

2. 図書館は絶版書価格、電報料、電信料などを払わなくてもよいから、その代りにより多くの図書を購入することができる。
3. 出版直後、あるいはその後僅かな間に購入しなかった多くの図書は、やがてどうしても必要になってきたときには絶版になっており、高価であったり、入手することが困難になったり、入手できなくなったりする。
4. もし図書館がすべての重要な新刊図書を年々めれなく購入してゆくならば、それが絶版になって困ったり、費用がかさむようなことは、結果的には比較的すくなくなるであろう。

その反論として：

1. 最善の判断のもとに慎重に選択しても、新刊図書の多くは恒久的な重要性をもっていないことがあとでわかってくる。それゆえ、モノグラフは時の試験によって、その価値が確かめられるまでは購入すべきではない。
2. 現在、図書館で手に入れられる絶版書のうちのものは、長い間、しばしば数年間も探求されてきたものである。あれこれ絶版書で欲しいものを購入する機会は、もしこの機会を逃せば、再びやってこないであろう。あるいは、仮りにやってきたとしても、価格はさらに高価になりそうである。
3. 多くの、おそらく大部分の真に重要な新刊図書は増刷、あるいは新版が出され、あるいは写真複製されて、後日でも入手できるようになるだろう。

以上のように要約した Danton 自身も、このような主張には議論の余地があると述べ、"この問題に対する最終的な回答は得られそうにもない。そして、多くの変数を無視して普遍的に適用しうる一般化を行なうことは明らかに実際的ではない、"<sup>15)</sup>と結論している。

しかし、一般的には新刊資料の収集を重視する場合は多いので、当然、新刊資料を選択するためのツールが盛んに利用されることになる。新聞、雑誌などに掲載される近刊予告、新刊広告、出版社の出版案内、出版販売目録などは収録が早いという特色をもっている。また出版販売関係誌は新刊リスト、近刊予告を収載しているの組織的に新刊資料を見付け出すことができる。例えば「出版ニュース」<sup>16)</sup> *Publishers' weekly*,<sup>17)</sup> *Bookseller*<sup>18)</sup>

などは、それぞれ国内市販の新刊書リストをもっている。またカレントな全国書誌、例えば、日本の「納本週報」<sup>19)</sup> イギリスの *British national bibliography*,<sup>20)</sup> ドイツの *Deutsche national Bibliographie*,<sup>21)</sup> フランスの *Bibliographie de la France*<sup>22)</sup> などにも利用される。さらに、月刊で出されるために新しきの点では多少欠けるとしても、*American book publishing record*,<sup>23)</sup> *Cumulative book index*,<sup>24)</sup> *British books*,<sup>25)</sup> *Biblio*<sup>26)</sup> など、いずれも新刊資料の選択ツールとして役立つ書誌である。

他方、古書をリストしているものとしては、「日本古書通信」<sup>27)</sup> *American book-prices current*,<sup>28)</sup> *Book-auction records*,<sup>29)</sup> *Jahrbuch der Auktionspreise für Bücher, Handschriften und Autographen*<sup>30)</sup> などがあるが、實際上この種の書誌によって探求書を発見するのは容易なことではない。広告、古書店の販売目録などに依存しなければならないことが多いので組織的な資料選択の難かしい領域である。

資料選択においては、その新旧とともに、それと密接な関連をもつ主題内容およびタイプの間からの検討も必要である。人文科学、社会科学、科学技術、さらにそれぞれの諸科学、文学作品、児童図書などによって、それぞれ評価の着眼点を異にするから、資料選択における画一的な選択基準の適用は避けなければならないことになる。

資料の内容に関して選択ツールを考える場合、特に主題書誌、書評紙(誌)が問題になる。主題文献目録には包括的なものもあれば、特殊主題のものもあり枚挙にいとまない。とりわけ、主題内容を限定した選択ツールとして有用なものは、Johns Hopkins University の *Economic library selections*,<sup>31)</sup> New York Public Library の *New technical books*,<sup>32)</sup> などのような包括的な専門主題のコレクションをもっている図書館の新取資料目録であろう。

現物にあたる以外に、注解、書評あるいは抄録を利用することによって、資料内容を知ることも選択決定のために必要なことである。一般の新聞、雑誌には書評欄が設けられていることが少なくない。書評紙(誌)には「日本読書新聞」「週刊読書人」「図書新聞」*Times literary supplement*, *New York Times book review*, *New York Herald Tribune weekly book review*, *Saturday review* などがあり、各専門主題分野で問題になった資料は専門誌の書評として取り上げられることが多い。さらに選択書誌、販売書誌には注解付きの記入のものが数多くあ

## 資料選択要因の考察

る。このほか、抄録を利用することによって、雑誌論文その他の資料の内容を知り、選択の手がかりを得ることもできる。

ただ、出版物全体の比率からみれば、書評のあるものは比較的限られ、しかも書評されるものは一般に好評のものに限られがちであるために、選択をとりやめるツールとして書評を用いることはむしろかしい。また、<sup>38)</sup> 図書の選択者は通常、自分の知らない人が書いた書評から得られたインフォメーションや批評に基づいて自分の図書館のために価値を判定する。これに対して、書評者は決して特定の図書館を想定して書評するのではない、<sup>39)</sup> といわれるように、図書館を念頭において書評が書かれているのではないから、資料選択にこれを使うためには、書評に与えられている評価を図書館の場合に組みかえてみる必要がある。

資料のタイプとしては、いわゆる図書のほかに逐次刊行物、パンフレット、点字資料、楽譜、地図、学位論文、政府刊行物、フィルム、レコード、マイクロ化された資料など極めて多様である。これらタイプの面から選択ツールをみるならば、図書の場合が最も豊富である。これは文献の歴史において、図書形態の資料が最も永く、かつ優位を占めていたこと、および形態的に書誌調整が容易であることによると思われる。

すべてのタイプにわたって収録しているか、あるいは図書を中心に収録しているものはすでに述べた全国書誌、販売書誌などである。図書のうちでも、コレクションの中核となる参考図書は別類としてリストされるほか、「日本の参考図書」<sup>34)</sup> Winchell の *Guide to reference books*,<sup>35)</sup> Walford の *Guide to reference material*,<sup>36)</sup> などに解題つきでリストされているので、選択のためにこれらを利用することができる。

逐次刊行物を収録しているものとしては、世界各国の各主題にわたる雑誌のうちから選択的にリストしている *Ulrich's international periodicals directory*,<sup>37)</sup> 「日本雑誌総覧」<sup>38)</sup> アメリカの *N. W. Ayer and Son's directory of newspapers and periodicals*,<sup>39)</sup> イギリスの *Willing's press guide*,<sup>40)</sup> ドイツの *Leitfaden für Presse und Werbung*<sup>41)</sup> などのディレクトリーがある。パンフレットその他の資料の選択ツールとしては *Bulletin of public affairs information service*,<sup>42)</sup> *Vertical file index*<sup>43)</sup> などを用いることができる。

また、年々増加の一途を辿る政府刊行物を収録している各国の政府刊行物目録も選択ツールとして次第にそ

の重要度を高めつつある。例えば、日本の「政府刊行物月報」アメリカの *United States government publications: Monthly catalog*,<sup>45)</sup> イギリスの *Government publications monthly list*<sup>46)</sup> などがあげられる。さらに、世界的な大出版者ともいえる国連の *United Nations publications: Catalogue*<sup>47)</sup> をはじめとする書誌類も同じような意味で忘れられてはならないであろう。

### E. スペースの問題

第5に、配架スペースの面での制約もコレクションの規模を規制するので、これも選択上の一つの要因に加えてよいであろう。いうまでもなく、図書館は書庫ではないから、配架スペースは同時に利用スペースとの関係において考えるべきである。スペースに関連して、利用できる他のコレクションの有無も検討する必要がある。例えば、関連主題のコレクション、あるいはその主題を包括する大規模なコレクションが近傍に存在し、それが利用できるならば、あえて手もとに保管しておかなくても済む資料が少なくないはずである。それぞれの図書館の資料所蔵関係は蔵書目録、新収目録、増加目録などによって明らかにされている。また参加館の協力のもとに維持されている総合目録によっても相互に所蔵内容を知ることができる。したがって、インター・ライブラリー・ローンあるいは複写の手段等によって他館の資料の利用が可能であるならば、手もとは是非なければならぬ資料を優先的に受入れるという方法がとれる。

他館の所蔵資料の有無をも確かめて資料選択において優先順位を設けるのは、図書予算の面から必要であるからだけでなく、施設面からの制約も考慮しなければならないからである。他に保存図書館があるとか、保管スペースがあるとかして、移管あるいは転配架が比較的容易にできるのであれば、新刊資料の選択・受入れに対する施設面の制約は少ないとはいえる。

従来、孤立的な性格を永い間もち続けていた図書館が相互貸借、協同書誌調整、保存図書館の共用による協同保管、さらには資料の協同購入を行なって責任を分担しようとする気運が次第に高まりつつある。これは図書館が相互に連携しない限り十分に機能しえなくなったことの一つのあらわれであるが、世界的な傾向であるとみることができる。このような趨勢は個々の図書館の資料選択のあり方に影響を与えずにはおかない。特定の図書館に必ず備えておくべき資料以外の境界領域のものとか、一時的に利用されるにすぎないものは、他のコレクションに依存することによって、特色のあるコレクションを



構成することができれば、多くの面において好都合である。

#### F. 財源の問題

資料購入のための予算、つまり資料費についても考えておかなければならない。これは資料選択上の各種の要因のうちでも、とりわけ重要な要因である。限られた資料費をいかに有効に費すかが、資料選択の中心課題の一つになっているからである。勿論、この場合、単純に資料費だけを考えるのではなく、選択された結果、資料が受入れられ、整理され、各種の処理を経て利用できるようになるまでの諸経費をも含めて考慮する必要がある。

また、資料費の総予算額が必ずしも図書館で自由に支出できるとは限らない。このことは選択者との関連のもとに検討する必要がある。例えば、ドイツをはじめヨーロッパ大陸の大学の中央図書館では、資料費の総額が図書館の自由裁量にもとづく支出に委ねられているが、アメリカ、イギリスの大学図書館では学部で資料費が配分される場合が多いといわれている。<sup>48)</sup> これは、前者においては図書館員のうちの主題専門家が資料を選択し、後者においては利用者である各学部の教授が資料選択に協力的であることの反映であるともみることができる。両者の利害得失については後述することにしても、ここでは各部門間の資料費の配分の仕方、継続費の比率などは各館の特殊性によって、かなり異なっていることだけは指摘しておかなければならないであろう。

特に、資料費との関連において選択ツールをみる場合、出版販売書誌、全国書誌、予約書目録などの記入における価格表示が問題になる。予算を最も有効に使うすぐれたコレクションを構成するためには、個々の資料の価格にこそ細心の注意を注がなければならないからである。

もっとも、一定の予算のもとに調和のとれたコレクションを構成しようとするのか、調和ということには拘泥せず、偏っても特殊性のあるコレクションを構成しようとするのかは、主として利用目的によって左右される。大部で高価な資料は図書館でなければ購入できないという考えから、図書館で積極的に受入れようとする場合もあれば、他方では、ある資料をもし受入れなければ、どの程度の損失を招くかという判断を加え、それに基づいて、ある程度予算の枠を超えようとも購入することに決定する場合もある。つまり、財源からくる制約は無視できないけれども、それは単独の要因としてよりは、むしろ他の要因との関連において捉えられる必要がある。

#### G. 選択者の問題

すでにとりあげた選択上の諸要因は相互にからみ合っており、相対的にせよ、それらの優劣の順位を客観的なしかたで決めようとするのは容易なことではない。しかし、いずれの要因も何らかのかたちで選択ツールとしての書誌類と結びつけることができ、書誌類の運用の仕方によって、各要因を反映した資料選択を行なうことができるはずである。

したがって、選択者としてまず考えられるものは、書誌的知識をもち、書誌類を効果的に運用することのできる技術を備えた図書館員である。図書館員は図書館の目的を理解し、コレクションを量および質の面から検討しうる立場にあり、利用者の要求を客観的に捉えることができるはずである。

利用者の要求が具体的に著者名あるいは書名を指定して出されたときには、多くの場合、書誌を利用して要求された資料を特定化し、選択および発注のために必要なインフォメーションを得ることができる。これは選択ツールとしての書誌が書誌的事項の確認のために利用される場合である。しかし、利用者から出される要求は常に具体的なかたちをとるとは限らない。しばしば主題が手がかりになるだけであったり、要求が特定化されないまま、あいまいなかたちで出される場合がある。そのような場合には主題からのアプローチが必要となり、著者・書名アプローチの場合ほど容易に書誌的事項を確認することはできない。ことに、特定化された資料の価値を検討したり、同一主題に関する数種の資料のうちから、最も適当と思われる資料を選定することは容易なことではない。また出版されていることがわかっている、入手経路がつかめなかったり、入手できないほど高価であったりするならば、それが選択上の阻害要因となる。そのような場合には、原書の代りに翻訳書、初版の代りに再版、原論文の代りに抄録、類書の中から代替資料を選ぶという解決策があるが、この種の選択活動は単なる書誌的知識だけでは十分に行なうことはできない。

勿論、図書館員のなかには書誌的知識と専門家に劣らない主題に関する専門的知識を兼ね備えているものも少なくないが、図書館の規模が大きくなるに従って、扱う主題領域も拡大するので、適正な選択のためには利用の立場からする示唆なり、協力なりが必要となる。

そのようなかたちで利用者の要求をとりあげることは有効である。しかし、仮りに利用者の要求を強調するあまり、実際に受入の要求が出された資料を図書館員が特

## 資料選択要因の考察

定化し、予算の範囲内で受入れるという業務にとどまるならば、形式的には選択業務のかたちをとろうとも、図書館員は資料の単なる発注・購入事務を集中的に代行しているのと何ら変るところはない。受身の発注事務に終始しているならば、常に要求の後手になり、決して利用者が満足するだけのコレクションをつくることはできない。利用者から資料選択に対する信頼をかちうるためには、要求の予測できる資料をいち早く入手し、要求があった場合には即座に 대응する態勢を整えておくことが肝要である。

このことを選択ツールに組みかえて考えるならば、新資料の発見のために書誌類を活用することにはかならない。この場合には、どうしても書誌的知識のほかには資料の主題内容を的確に把握しうる専門主題の知識を必要とする。また、利用者の資料に対する要求も、主題に関する知識と研究その他において実際に資料を利用した経験が豊富でなければ的確に予測することはできない。このような意味から、図書館の利用者のうちから資料選択に対する協力が得られることは極めて望ましいといえる。

もっとも、専門的な知識をもつ利用者が資料の選択における主導権をもって、これを行なう場合にも幾つかの利点はある。殊に、書誌的ツールをも駆使できる能力があれば十分に期待できるコレクションがつくられるはずである。しかし所詮、資料の選択が彼にとって本務ではないのであるから、全面的に、あるいは継続的に選択の業務を任せすることはできない。しかも一般に個人的な関心には偏りが生じがちであり、客観的な立場で資料を評価することは容易なことではない。このように資料選択本来の目的から外れる要因を多く含んでいるとすれば、いかに精力的な協力者であっても、これに全面的に依存することは避けなければならないであろう。

### III. 選択機構および選択方針

すでに検討したように、利用者の要求は資料選択において十分に考慮すべき要因である。しかし、利用者の要求だからといって、すべてを鵜呑みにすることは、その他の要因を無視してしまうことになりかねない。ある人にとって特定の資料が役に立つ善いものであるとしても、かならずしも他の人にとってもそうであるとは限らない。したがって、選択に際しては、利用者であろうが、図書館員であろうが、個人の主観的立場によって左右されるべきでなく、ましてや恣意が許されるべきではない。

つまり資料の評価はできるだけ客観的な基準によってなされるべきである。

それでは、その基準とはどのようなものであろうか。われわれは図書館のコレクションを構成するために、特定の資料を選択しようとする場合、その結果を見通して資料を選ぶわけにはいかないから、どうしても過去の経験、または一般原則に基づかざるをえない。また一つの目標のもとになされる選択業務は当然、明確な選択方針に従って行なわれなければ一貫性を保つことはできない。選択活動は目標を設定し、それに対する手段を選んで実現を図るべき連続的過程だからである。

選択方針は選択のガイドとして依拠するために利用されるだけでなく、利用者に対して図書館がなぜ、どのようにして特定の資料を選ぶかについて周知せしめるためにも用いられる。そのような選択方針には選択の基本原則、選択機構、選択上の責任者、選択すべき資料の主題分野、各種タイプの選択基準が織り込まれるが、いずれも選択にかかわるその図書館独自の要因への考慮に基づいている。それゆえにこそ、すでに述べたような各種の要因をとりあげる必要があるのである。

選択方針の大綱をうち樹てるためには、利用者の要求を反映しうる選択機構をつくるのが先決である。この選択機構は図書館側の選択者と利用者側の代表者との協力提携を基礎にして構成されるが、そのいずれの発言力が強いかは主として図書館の性格に基づいている。したがって、選択方針を決定する際にも、選択上の諸要因のうちいずれに優劣をつけるかは、おのずから選択機構の性格によって左右されることになる。

なお、一旦、選択方針が決定されたならば、図書館の目的その他に重要な変更があるとか、明らかに改訂すべき事態が生じないかぎり、一貫してその方針に従って選択活動が続けられるべきである。そのためには常にそれに見合うだけの予算措置が必要である。特に予算のままに選択方針がぐらつく危険があるからである。<sup>49)</sup>現在充実している分野の資料の購入を中止するならば、現在のコレクションの価値は急速に低下するであろう。また従来無視されていた分野の資料を収集しようとしたとしても、強力な研究資料は早急に小額の費用でつくり上げられるものではない、<sup>49)</sup>というイリノイ大学図書館の受入方針の記述は、一貫して選択方針を堅持すべきことを強調したものにほかならない。

選択方針を貫くためには確固たる選択機構の支持が必要であるし、また選択機構の構成に十分留意しなければ、

何らその運営および維持が円滑に行なわれる保証はないことになる。しかも選択機構を組織的に運営するためには、まず既刊の資料の発見を前提とする。利用者個々においても、新刊広告、雑誌の書評などによって個々の資料の存在を知るであろうが、組織的な選択過程に乗せるためには、それらの資料をリスト化した書誌類を活用する必要がある。単一の書誌によってすべてのタイプの資料を包括的にリストしたものはなく、たとえ収録点数が少なくても迅速であるとか、書評を与えるという特色も持っているものもある。したがって、資料選択のためにこれらの書誌を利用する場合には、それぞれの書誌の特色を生かすようなしかたにおいて、新資料の発見に、書誌的事項の確認に併用する必要がある。

### おわりに

これまで資料選択上の諸要因と関連づけて選択ツールとしての書誌の活用を検討してきたわけである。結論的にいえることは、書誌的知識と専門主題の知識を兼備した図書館員が資料選択を担当し、選択機構を通じて利用者の要求を打診しながら、充分時間をかけて資料選択に従事するならば、長期的にみて経済的で、しかも理想的なコレクションを構成するための条件が整うということである。図書館一般の現実には、このような条件を整えるにはあまりにも程遠い状態にある。しかし一見、除き難いと思われる数多くの阻害要因も、すでに述べたような各要因の面から、可能なかぎりにおいて書誌的ツールに組みかえるならば解消しえないわけではないと思われる。

以上、主として図書館の内側から資料選択の問題をとりあげたが、この問題は同時に図書館をめぐる外部的側面からの検討も必要とする。すなわち、内外出版物の流通機構にかかわる出版者、書店等の問題がある。ことにわが国の委託販売制という特殊な販売方式と版元——取次店——小売（書店）という資料の配送・返本の問題と書誌収録における時期的ズレの関係が特異な問題を提供する。さらに、資料流通の阻害要因としての検閲、発売禁止等の問題は政治上と学問上の価値の対立、あるいは古い価値と新しい価値の対立、あるいは社会の価値と個人の価値の対立というかたちで捉えることができるであろう。これらの論じ残した問題は稿を改めて検討することにしたい。

(図書館学科)

- 1) McColvin, Lionel R. *The theory of book selection for public libraries*. London, Grafton, 1925, 以来理論的研究が行なわれている。
- 2) 東京, 全国学校図書館協議会, 1952-
- 3) 4th ed. 1958. New York, Wilson, 1959 および補遺。
- 4) 8th ed. 1962. New York, Wilson, 1962.
- 5) 10th ed. New York, Wilson, 1961.
- 6) 「週刊読書人」に掲載。
- 7) 東京, 日本図書館協会, 1951-
- 8) Chicago, A.L.A., 1956-
- 9) London, National Book League, 1940-
- 10) Frankfurt am Main, Buchhändler-Verenigung, 1951-
- 11) Paris, Association pour la Diffusion de la Pensée Française, 1945-
- 12) Chicago, A.L.A., 1931 および補遺 (1931-38), 1940.
- 13) Cambridge, Harvard Univ. Press, 1953.
- 14) Danton, J. Periam. *Book selection and collections: A comparison of German and American university libraries*. New York, Columbia Univ. Press, 1963. p. 122-3.
- 15) *Ibid.*, p. 123.
- 16) 東京, 出版ニュース社, 1946-
- 17) New York, Publishers' Weekly, 1872-
- 18) London, Whitaker, 1858-
- 19) 東京, 国立国会図書館, 1955-
- 20) London, Council of British National Bibliography, British Museum, 1950-
- 21) Leipzig Börsenverein der Deutschen Buchhändler, 1931-
- 22) Paris, Cercle de la librairie, 1811-
- 23) New York, Bowker, 1960-
- 24) New York, Wilson, 1898-
- 25) London, Publishers' Circular, 1959-
- 26) Paris, Hachette, 1933-
- 27) 東京, 日本古書通信社, 1947-
- 28) New York, American Book-Prices Current, 1895-
- 29) London, Karslake, 1903-19; London, Stevens, 1920-
- 30) Hamburg, Hauswedell, 1950-
- 31) Baltimore, 1915-
- 32) New York, 1915-
- 33) Merritt, LeRoy C. *The pattern of modern book reviewing*. <Merritt, et al. *Reviews in library book selection*. Detroit, Wayne State Univ. Press, 1958> p. 1.
- 34) 改訂版. 東京, 日本図書館協会, 1965.
- 35) 7th ed. Chicago, A.L.A., 1951 および補遺。
- 36) London, Library Association, 1959 および補遺。

資料選択要因の考察

- 37) 11th ed. New York, Bowker, 1965.  
38) 1963. 東京, 出版ニュース社, 1963.  
39) Philadelphia, Ayer, 1880-  
40) London, Willing, 1874.  
41) Essen, Willy Stamm, 1947-  
42) New York, P.A.I.S., 1915-  
43) New York, Wilson, 1936-  
44) 政府刊行物普及協議会編. 東京, 政府刊行物サー  
ビスセンター, 1957-  
45) Washington, Government Printing Office,  
1895.  
46) London, Stationary Office, 1922-  
47) Lake Success, N.Y., 1947-  
48) Danton, *op. cit.*, p. 34.  
49) *Ibid.*, p. 11 より再引用。